
影が伸びるその先に

あおいろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

影が伸びるその先に

【Nコード】

N5077P

【作者名】

あおいろ

【あらすじ】

「今浦くんって面白いね」

彼女のその一言に込められた本当の意味を知った時、彼女の秘密が暴かれる。決して誰も気付くことができない秘め事。

…足元にあるはずの『影』が彼女にはないということに。

第1話 春の日差しの中での出会い（前書き）

初投稿です…

第1話 春の日差しの中での出会い

入学式当日。

期待と不安に満ち溢れた高校生活が始まる。満開に咲いた桜に春の陽気な日差しのせいかな、それとも新しい出会いに胸を踊らしていたからか、俺は浮かれ鼻歌交じりで登校していた。

この時、俺はただ気の合う友達と一緒にのほほんと過ごしたり、彼女を作ったり『普通』の高校生活を楽しもうと思っていたのに、それを180度変える『非日常』の出会いがあることは知るよしもなかった。

『平成22年度木堂学園高等学校入学式』

堂々とした字で書かれた看板は校門の前に立ち新入生を出迎える。真新しい制服に身を包んだ俺は意気揚々と校門を潜った。

入ってすぐ掲示板に貼られたクラス分けの表を見て自分の名前を探す。

「今浦…今浦…」

ブツブツ呟きながら上から順番に見ていく。なかなか見つからず必死になっていたから隣で同じように自分の名前を連呼する女の子に気付かなかった。

「「あつた!!」」

「…へっ？」

「…えっ？」

名前を発見できた喜びの声がシンクロした。そして横を向くと一人の女の子と目が合った。

「フッフ、声被っちゃったね」

女の子は恥ずかしそうに照れ笑いを浮かべ言った。

それがなんともまあ…可愛いすぎた。

「おっ…おう」

思わず見とれてしまい曖昧な返事しかできなかった。心臓は大きく脈打ち、緊張のあまり全身がガチガチになり、次の言葉が出ず固まった。そんな俺を首を傾げながら女の子は見つめる。

ズキューン!!

俺は胸を射ぬかれチェックメイトされた。

なんだこの可愛い生物は!ダメだろうこれは!!

「千里、行くよー」

「はい、じゃ私行くね」

『ちさと』と呼ばれた目の前にいる女の子は元気よく返答する。

「…あっ…待っ…」

時すでに遅し。俺が呼び止める前には彼女は走り出していた。

肩まであるさらさらとした髪を揺らしながら走る彼女の後ろ姿。校内には満開の桜が立ち並び、風が吹くと花びらが舞う。

そんな綺麗な光景を見送っていた俺は有り得ないことに気付いてしまった。

「…嘘…だろう…?」

…走り去る彼女の足元に伸びているはずの影がないことに。

第2話 話し掛けられた理由とは（前書き）

緊張します…

第2話 話し掛けられた理由とは

「皆さんようこそ我が学園へ。新しい出会いに期待を膨らませていると思いますが…」

校長の長い挨拶が続いている中、俺はさっき出会った女の子のことが気になって仕方がなかった。

睡眠を誘うはずの話は右から左に抜けそれどころじゃない。

「これから名前を呼ばれた方は起立して返事をして下さい。新入生点呼、1年A組朝山和哉君」

「はい」

『影』が無いなんて俺の見間違いじゃないのか？まさか彼女が幽霊とかじゃないよな…

「1年B組山口有子さん」

「はい！」

…でも本当に影がなかったらどうする？

誰かに話すのか、それとも直接本人に聞いてみるのか？

一体彼女は何者なんだ？

いくら考えても答えは出ず、永遠に続いてしまいそうな思考のループを繰り返していた。

そのせいで俺は気付いていなかった。

「1年C組今浦孝人君……………今浦君！！！」

「…はっはい！！」

名前を呼ばれるなんて聞いてねえよ！すっげー恥ずかしい。

「うっ…ハっ…ハハハ…」

「ちょっと千里、笑いすぎ」

後ろの席に座っている子が必死で笑いを堪えていたが、笑い声が洩れている。

…うん？…ちさと…？

「あっ」

振り返ったら笑いを堪えていたのはあの女の子で、目が合うと微笑み返してくれた。その笑みにときめいたのは言うまでもない…。

そしてそのまま入学式が終わり、教室に移動した。予め決められた席に着き、担任がやってくるのを待っていた俺はボーっと窓を見つめた。そうしていたらあの女の子が話し掛けてきた。

「…今浦くんだよね？さっき私と声が被ったり、入学式で名前呼ばれてたのに全然気が付いてなかった男の子」

「えっ…そうだけど」

やっぱり緊張する。可愛すぎるのもあるけど、どうしても彼女の『影』が気になる。

「…今浦くんって面白いね。私は三國千里、よろしく!」

「おっ…俺は今浦孝人。よろしく」

まさか話し掛けてくれるなんて思ってもいなかったから驚いた。だけど彼女にとってはただの自己紹介ではなく、別の意味で話し掛けていたことには俺は知るよしもない訳で。

第3話 怪しい行動（前書き）

ユニークの評価を頂きありがとうございます。

第3話 怪しい行動

入学式から十日ほど経ち、次第にクラスの中でグループが出来はじめた頃。

俺はずっと三國さんと彼女の『影』が気になって仕方がなかった。

授業中、黒板を板書しようとするれば前方に座る彼女の後ろ姿が気になり、廊下を歩いているのを見かけると彼女の『影』を探してみたりする。

三國さんが何処にしようとなんをしようと『影』は現れない。

一日中彼女を視界の中に捉えているばかりで『影』のことは分からず、疑問は日を追うごとに膨らむ一方だった。そして毎日見れば見るほど三國さんは可愛すぎて、果たしてどっちの意味合いで彼女を見ているか分からなくなっていた。

「た・か・と・くーん!!」

「相田、普通に呼んでくれ」

「別に良いじゃねえか。孝人」

そんな日々を過ごしていた俺にも友達が出来た。俺の出席番号の前の相田修二は、席が近いのもあって自然と仲良くなった。

「孝人、お前三國さんのことが好きになっちゃったろう？ そうだろう！」

思わず飲んでいたコーヒー牛乳を吹き出しそうになった。

「な…なんでそうなるんだ？」

…落ち着け俺！！冷静に対処しろ！

上擦る声を必死に抑え相田に聞き返した。

「動揺してるぜよ、孝人くん。だってお前いつも三國さんのこと見てたぜ」

「…」

バレてた…。結構頑張っってこっそり見るようにしてたのにな…。

「分かった孝人。この相田修二様に任せろ！愛のキューピッドになっってやる！」

「相田、勝手に話を進めるな…ってちよっと待て！！」

元気よく三國さんの元へと駆け出した相田を止めることはできず、二人のやり取りを仕方なく見守ることにした。しばらくすると相田は跳び撥ねて戻ってきた。

「孝人、ビックニュースだ！！土曜日に親睦会開こうって言っただ。そしたら他の女子も行くって言うから、俺も何人か声掛けるから皆で遊ぼうとなった！」

「おっ…おう！！」

この時ばかりは『影』のことは忘れ、つい嬉しくて自然と口角が上がった。

放課後部活に励む生徒の音がグラウンドに響く中、俺はフラフラと屋上に向かっていた。何か部活を始めようと仮入部するがどれもしつくりこなくて、一休憩するためだった。

階段を上りながら相田が約束してくれた親睦会について考えてたらまだニヤニヤ笑っている自分に気付いて、一人で気まづくなっていた時。

屋上の扉の向こう側で話し声が漏れていた。それは揉めているように聞こえた。

「ギーちゃんの分からず屋!!」

「分からず屋とはなんだ!?! お主こそそうではないか!」

(…何やってんだ?)

恐る恐る扉を開けると屋上を囲むフェンスに背もたれ携帯をいじる三國さんがいた。

すると俺がいることに気付き凄く驚いた顔で目を白黒させ、混乱しながら言ったんだ。

「……なんで？」

第4話 屋上に何かいる…? (前書き)

ユニークの評価を頂いて大変うれしいです。

第4話 屋上に何かいる…？

「…なんで？」

三國さんは俺がここにいることに凄く驚いていた。

「えっ…えー！ー！！？」

屋上に混乱した三國さんの声が木霊し、その声に俺は驚いた。

「み…三國さん？」

「…ごめん、大きい声出して…」

「いいよ大丈夫…。えっとそのーさっき誰かといいた？」

恥ずかしがる三國さんは可愛すぎて思わず自分が照れそうになったので、ごまかす為に話題を変えた。

「誰もいないよ!! 電話してただけだよ!!」

二人分の声が聞こえたはずなんだけど…まあいいや。

「……………」

三國さんも緊張しているのか会話が途絶えてしまった。どうにかして話を続けようと、必死に頭をフル回転して話題を探していたら三國さんが俺をジッと見つめ観察していた。

「うゝん」

「…なんか俺付いてる?」

「憑いてるといえば憑いてるかな」

「えっ虫!? 虫が付いてるの!? ととっ取ってくれ!! 早く!!」

半狂乱に近い状態で泣き叫びながら俺は三國さんに助けを呼んだ。情けないけど俺は虫が一番大嫌いだ。

「あっははははは!!」

二人の間に流れていたの微妙な空気が一気に消し飛んだけど、俺はまだパニック状態、三國さんは大笑い。

「笑わないで早く助けて!!」

「ごめんね。笑ったりして」

「…虫付いてないの？」

「虫は付いてないよ。本当に今浦くんって面白いね」

彼女が何気なく言ったこの言葉の本当の意味を知る日はそう遠くはなく、そんなことを知らない俺はただ親睦会が待ち遠しいだけだった。

第5話 朝の追跡劇

土曜日。俺は一際大きい駅に佇んでいた。親睦会の集合場所は駅前の大きい時計台の前に10時なのだが張り切り過ぎて早く来てしまい、暇を持て余していた。

「…暇。そして眠い！」

興奮して睡眠時間1時間だなんて恥ずかしくて言えない…。目覚ましのガムでも買おうとコンビニに向かった。

「まだ時間あるな…」

凄い眠気が襲ってきたのでからいガムを買い、包装を外した。噛みながら適当に摘んだ雑誌を読み始めた時だった。

俺の視界に『何か』が猛スピードで駆け抜けていった。一瞬だったけどその『何か』を捉えることができた時には手に取った雑誌を乱暴に棚へ戻していた。陸上選手顔負けの速さで去っていった三國さ

んに驚きながらも彼女の後を追いかける。只事じゃないと思ったら反射的に身体が反応していた。

コンビニを慌てて出ると三國さんは既に信号を渡り路地へと曲がっていた。青信号が点滅していたのを急いで渡り、路地へと入った。一本小路に入っただけで閑散としていて、錆びれた通りだった。

「はっ…早い…」

角を曲がると既に三國さんの姿はなく、虚しく自分のシューズと地面が擦れる音が雑居ビルの壁に反響する。

「わああー！！」

するとどこからか投げやりに叫んだ声が辺りに響き、声がした方に目を向けると三國さんが建物との間でガックリと肩を落とし佇んでいた。声を掛けようかと迷っていたら三國さんが振り返った。

「……今浦くん？」

「ハアハア…三國さん速いね。全然追い付けなかった」

「どうして追いついてきたの？」

「コンビニで立ち読みしたら三國さんが慌てて走っていくのが見えたから」

「…本当にそれだけで？」

「それだけでもない…かな？三國さん『何か』追いついてなかった？」

コンビニで見た『何か』は三國さんともう一つあった。だけどその『何か』はボンヤリとして霞んでいたから自信はないけど黒い小動物に見えた。

「今浦くんがそう見えたのならそうかもしれないね」

俺は三國さんの言っていることが理解できなかった。返答に困っていたら三國さんは既に路地裏から出ていた。

「三國さん待って!」

「早く行こう今浦くん」

三國さんの隣にたどり着いた時、彼女は俺の顔を見て眉を潜めて呟いた。

「∴もうそこまで見えてたんだね」

「何か言った?」

「なーんでもない! 皆待ってるから行こう!」

結局三國さんが何を言ったかは分からず、すっきりとしないまま集合場所へと戻った。

第6話 親睦会

集合場所である駅前の時計台には相田と相田が呼んだ男子、三國さんの友達数人が集まっていた。そして俺と目が合った相田はニタツと笑う。

「なーに三國さんと仲良く遅れて登場してんだ。た・か・と・く・ん」

「茶化すなよ相田…」

「お話しはあとでじっくり聞かせてもらうぜ」

相田は俺の肩をガツシリと掴み、勝ち誇ったような微笑を浮かべ俺を逃がさないようにする。

「うっ…」

でも相田になんて話せば良いのか分からないから三國さんに助けを呼ぼうとしたら、彼女はすでに女子の輪の中に入っていて救助要請はあえなく終わった…。

「さあ皆集まったことですし行きますか、いざ遊園地へ!!」

そんな俺を面白がって見ていた相田は皆に声を掛け出発することになった。

今回の親睦会は、国内屈指の規模を持つ娯楽・宿泊施設を備えている巨大な遊園地で遊びつくそうというものだった。最近オープンしたばかりで、入場口では多くの人で溢れていた。すると相田は懷から一枚の紙切れを取り出して、自慢げに見せびらかした。

「皆様ご注目ください!! 特別御招待券だぜ! これで混んでいるゲートなんて問題ない!!」

「「「おーー!!」」」

一体どこから手に入れたか謎だが相田のおかげでスムーズに入場できた。

その後は皆ハイテンションで盛り上がった。

ジェットコースター、観覧車、コーヒークップ、空中ブランコ等：

俺もはしゃぎつつ三國さんの様子を伺ってみると、朝の出来事がなかったかのように楽しそうに笑顔を浮かべていた。

「さあ皆様お待ちかねのドキドキワクワクお化け屋敷タイム！！」

「なんだそれ…」

「何を言う孝人くん。これは女子とペアを組んでクリアしてもらう
だぜい！！」

「何!？」

相田はどこからかともなくクジを引っ張り出してきた。…ここはもう
ツツコまないでおこう。

そして皆クジを引いてあっという間にペアが出来た。同じ色同士で
組むみたいたが…

「青…青…青」

「今浦くん」

肩をツンツンと突かれ振り返れば息が詰まりそうになった。俺と同じ青色のクジを持っていたのは三國さんだった。

「ワッホー！！」

今ならビルから落ちても飛んでいけそう…。

「いっ…行こうか…」

三國さんと一緒に歩くだけで心臓が舞い踊りそうになる。

だけど足元に目を向けると俺の『影』しかなくふと現実に戻る。でも三國さんはちゃんと俺の横にいる。

…朝の出来事は何だったんだろうか？
三國さんは俺に何を言いたかったんだろうか？

「ああー」

「どうしたの？」

「うーなんでもないよ」

ゴチャゴチャ頭で考えてたら、いつの間にかお化け屋敷の入り口に
着いていた。

此処のお化け屋敷は結構怖いらしい。だから俺は三國さんが怖がっ
ても大丈夫なように気を引き締めてお化け屋敷に入ったんだけど…

「へえ、この鬼よく出来てるね。酒吞童子をモチーフにしてるのか
な？うーんでも微妙…」

「化け狐に呪いの日本人形…もうちょっと怖いのかな？」

入ってみたら俺の予想は見事に破られました。全然怖がってないし、
仕舞いには仕掛けのお化けを観察している三國さん。しかもお化け
の知識が半端なく、一目見ただけで妖怪の名前を言い当てていた。
俺はというと全然怖くなく、逆にそんな三國さんに驚いていた。

「今度は鬼蜘蛛だよ」

「えっ蜘蛛!？」

三國さんが指差す方向には、長い脚をワサワサと動かす真っ黒い毛に覆われた巨大な蜘蛛。

もちろん作りものって分かってたよ。だけどね…

「虫いいいいやああああ!!!!」

お化け屋敷に俺の情けない雄叫びが木霊する。そして絶叫を上げながら全力疾走。出口付近で相田がポカンと口を開け茫然としていた。

「っふふ…くく…」

「三國さんいいよ。遠慮なく笑って」

「ぶふー」

我慢できずに吹き出す三國さん。真っ白に燃え尽きた俺。

あの後三國さんを放置し逃走した俺は、皆に散々笑われ虫嫌いがバレてしまった。三國さんに必死に謝っていると彼女は肩を震わせながら笑いを堪えていた。

最後に情けない一面を見られてしまった親睦会。

俺が思い描いていた『日常』が此処にあった。だけどこの『日常』が逆転し『非日常』というものに自ら足を突っ込んでいたことにはまだこの時は気が付いていなかった。

第7話 暗闇の中で

「…あっ」

家の玄関のドアノブを半分回した所で、駅に自転車を置きっぱなしにしていたことを思い出した。

調子にのってはやぎ過ぎたのと、お化け屋敷の蜘蛛騒動で疲れがピークに達していた俺は迷わずバスに乗車。自転車の存在をすっかり忘れていた。

家から駅までは自転車で15分程の道のりで歩いたら倍の時間が掛かってしまう。しかもバスの本数が極端に少ないから、朝早くに家を出ないといけなくなる。

朝に減法弱い俺にとっては重要な問題、貴重な睡眠時間を削りたくない一心で駅へと戻ることにした。

「…さむ!」

昼間は暖かく小春日和だったのに今晚はやけに冷え込む。外気はひんやりと冷たく肌に刺さるような寒さで、さっきから鳥肌が立ってばかりだ。

「それにしても暗いな…」

住宅街を抜け田園風景をバックに河川敷をひたすら歩く。川沿いに設置されている電灯はどれも申し訳なそうに光を灯し、どの電灯もぼんやりと霞んだ明かりで頼りない。寒さも合間って俺は言い知れぬ不安に駆られた。

「…何にも無いよな」

急ぎ足で駅に向かおうとした時だった。突然一斉に電灯の明かりが消え、外気が一段と下がったように感じ全身がゾワリと総毛立った。

「えっ？ ちょっ…何!？」

突然視界から光を奪われると視覚が暗闇に慣れるまで時間が掛かるため、周囲を見回してもよく分からない。

「…ウウウウ」

するとどこからか犬が威嚇するような唸る鳴き声が聞こえた。そし

てその唸り声は段々と俺に近付いてきた。

直感的にこれはヤバいと思った。だけど足がその場に固定されたように全く動かせない。掌には脂汗をかき、心臓は激しく動悸をうつ。

(…動けよ足！逃げろ俺！！)

頭は警鐘を打ち鳴らし続ける。身体は得体の知れない恐怖で震え、膝は小刻みにわらう。

「ウウウウウウ」

唸り声が背後から聞こえぼんやりと青白い灯が辺りを照らす。ゆっくりと振り返ればそこには唸り声の持ち主がいた。

頭部に太い角を生やし、特徴的な一つ目は血走り、口から液をボタボタと地面に垂らした化け物。

化け物の周りには幾つか火の玉が浮遊していた。

「う…あ…」

逃げようとするけど全身に力が入らなくなり腰が抜けた。その場に座り込んでしまったが俺は逃げようと必死にもがく。

化け物はそんな俺を見て面白がっているような残忍な微笑を浮かべ、鋭利で尖く火の玉で怪しく光る爪を俺に目掛けて振りかざした。

俺は咄嗟に頭を抱え縮こまり目をギュツと閉じた。

――――ギン！！

「…えっ？」

ただどいくら待てども痛みも衝撃も来ることはなく辺りは静けさが広がっていた。そして地面と睨めっこしていた俺の視界に人の足が入る。

ピンクと黄色の蛍光色が印象強いシューズ、黒いタイツに細くて華奢な脚。灰色のパーカーにジーンズのハーフパンツ。

昼間散々見てきた三國さんが漆黒の刀で化け物の爪を防いでいる姿

だ
っ
た。
。

第8話 目撃（前書き）

明けてましておめでとうございます。

第8話 目撃

頭をふさぎ込んでいた時に耳にしたのは、三國さんが刀で化け物の爪を防いだ金属音だった。

彼女は力一杯に刀で爪を押し切り、押された化け物は強靱な脚力をバネにして後方に下がり三國さんとの間合いを離れた。

新しい獲物を見つけた喜びを表すかのように舌なめずりをする化け物。だが彼女はその一瞬の隙を見逃さなかった。がら空きとなった化け物の胸元に一気に踏み込み漆黒の刀を突き刺そうとする。

すると化け物は疾走する彼女に目掛けて頭部に生やす太い角を向けると…

飛ばしてきた。

（…えっ！？角を発射した！？）

あまりの突然の事の成り行きに付いていけない俺はただ驚いているばかりだった。

だが三國さんは動揺も焦りも見せることなく次の行動に移る。

漆黒の刀の柄を両手で握り、右足を軸に舞を踊るかのように円を描いた。

彼女を中心に真っ黒いつむじ風が起こり、化け物が飛ばした角はつむじ風に当たると粉々に粉碎された。

あまりにも彼女が化け物の攻撃を鮮やかに回避したので思わず見とれてしまった。

「ギーちゃん!!」

つむじ風が止むと三國さんは弾かれたように俺の方向を振り返り、慌てて誰かの名前を叫ぶ。

…でいつの間にか俺の周囲には何十もの青白い火の玉が不気味に揺らめいていたのだった。

「なああ!？」

「小僧、伏せろ!!」

頭上から低音の威厳に満ちた声で指示されたので、素早く言われた通りに頭を低くする。すると頬に熱風が吹き付け、火の玉は紅蓮の業火に吞まれていた。

「っ熱!!」

吹き付ける業火の熱風が熱くて起き上がろうとしたら、頭をいきなり押さえつけられた。

「ぐえっ」

「少しは我慢しろ小僧、行け千里!!」

「ギーちゃんありがとう!」

押さえつけられた頭を無理やり動かして三國さんの姿を追うと、すでに彼女は前方に立ち塞がる化け物に斬りかかるため、大きく跳躍していた。そしてもう一度右手に握られた漆黒の刀を化け物に突き刺した。

化け物は血走る一つ目をあらん限り見開き、身体を痙攣させる。次第に動きが鈍くなり、頭部から少しずつ塵になっていき闇夜に消えていった。

化け物が消えたのと同時に川岸に並ぶ電灯の明かりが灯り始めた。

「すっ…すげえ」

「今宵はこんなものか」

「こんなものかって……ていうか早く退いてくれ!!!」

「おっ忘れておったわ」

(忘れてたって…ひどい…)

解放されてすぐに俺を押さえつけた張本人を半分涙目でキツと睨みつけた。

そこには、綺麗な銀色の毛並みをもった「ど」が付くほどデカイ犬がいた。

「…いっ…い…犬が喋ったーーーー！！！！」

絶叫する俺の声が辺り一面に木霊した。

第9話 開いた口が塞がらない（前書き）

お久しぶりです…

第9話 開いた口が塞がらない

「開いた口が塞がらない」

このことわざ通り俺のお口はガバツと開いたままで「閉じる」という動作は忘却の彼方へと旅立っていた。

俺の情けない顔を見て苦笑いを浮かべる三國さん。

ガハハハと俺の反応を面白がって笑い続けるデカイ犬。

「うへえー！ー！」

化け物が消え去った後、電灯に明かりが戻ったが、停電だ！と騒ぐ野次馬が何処からともなくゾロゾロと群をなして此方に向かってきた。すると三國さんは慌てて俺のカッターシャツの襟首を引っ掴み、逃走を図った。

「ぐえっ」

「『三十六計逃げるに如かず』だよ、今浦くん!!」

「…はっ?…に!?!」

もはや自分でも何を言っているのか分からず無抵抗のまま引っ張られた。

ちなみに掴まれた時に彼女の顔がドアップになったから心臓が飛び上がったのは言うまでもない。

三國さんは迷うことなく駅とは逆方向に進み、住宅街を通り過ぎると人氣が少ない山間の道へと入っていった。首根っこを掴まれたまま走ってきたが、三國さんの走るスピードが速い為付いて行くので精一杯。乱れている呼吸に首を絞められるのは半端ではなかった。

「み…三國…さん…止まっ…て…」

「ふえ?…?」

「首…絞まってる…」

「あっゴメン!!」

息が絶え絶えになりながらも三國さんに声を掛けてたら隣で並走っていたデカイ犬が笑い出した。

しかも人の不幸を喜んでいるのかのように嫌な笑みを俺に向けてきた。

「小僧、情けないのう」

「…人の気も知らないでよく言うぜ。わんこさんよ」

「『わんこさん』だと小僧!!」

デカイわんこと睨みを利かせる俺。両者譲らずに睨みあっていたら三國さんが困った顔でまあまあ落ち着こうよと間に入ってくれた。

「…元は私が悪かったんだし、ゴメンネ今浦くん」

「いや…そんな…」

三國さんに謝られると弱気になってしまったがここでふとある事に気が付いた。

「あのさ…ここ何処?？」

「うーん、此処はね…分かる?」

(…ちょっと待って三國さん。何故逆に質問されてんだ俺)

心の中で三國さんにツツコミをしつつ辺りを窺う。鬱蒼と茂る木々に電灯が少ない、薄暗い山道に俺達は突っ立っていて、雲の切れ目から顔を覗かせる月光の明かりがやけに目立つ。そして前方5メートル程先に一つの祠があるだけだった。

「いやサッパリだよ。もし今此処で一人で放置されたら帰れない自信はある」

「じゃあ今浦君、他にこの場所で気になることとかはない…?」

はて三國さんは何を言いたいのだろうかと首を傾げつつ、もう一度周囲の様子を観察する。

「空気が…違う? 澄み切ってるって言えばいいのかな…」

「ほう、それは分かるのか小僧」

デカイわんこが感心したように呟いた。

「それは感知できるのに今浦くんって敏感なのか鈍感なのか分からないね」

三國さんは困ったように眉をひそめながら、小さな祠の扉を開けた。中に手を突っ込み祠から取り出したのは一枚のお札だった。それを俺の目の前に掲げる。お札はもはや何が書かれているかサッパリ分からなかった。円を縁取るように文字が羅列しており、紋様にも見て取れた。

「空気が違うのはこのお札のおかげだよ。この辺りの邪気を浄化してくれる効果があるだ。あとは探知機かな？力を込める術者の力量によって探知できる範囲は決まってくるけどね」

「おっ…おい三國さんストップ！！話が分かんねえよ！！そもそもさっきの化け物は何！？君は一体何者なんだい！？」

俺の知りもしないことを一気に話されても全く理解できない。とりあえず一つ一つ片付けていかないと脳がパンクしそうだった。今頃になってさっき化け物に襲われた恐怖が全身を駆け巡って震えとして表れた。

「…このお札に力を込めたのは私。あの付近で邪気を探知したから巡回してた。そこで居合わせたのが今浦くんだったという話」

今は三國さんの手元にはない漆黒の刀。それを闇夜も斬り裂かんばかりに自在に振り、白銀の毛を持つわんこと一緒に現れた。

「私は人知れず裏で霊や妖怪を退治や除霊などをしています『退魔師』」

の三國千里です!!」

：普通、満面スマイルで言うことではないなと思いながらお口をパツクリ開けた俺だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5077p/>

影が伸びるその先に

2011年10月8日13時20分発行